願成寺報

平成二十五年九月十二日

〒四四〇・〇八一二　豊橋市東新町二十八番地
☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 秋季彼岸・永代経のご案内

左記により勤修いたします
万障お繰り合わせて お誘い合わせて
お参り下さい

九月　二十日（金）　午後一時半　草取り・餅つき会
　　二十二日（日）　午後一時半　法要のみ
　　二十三日（祝）　午前十時　法要・法話　住職
　　午前十二時　お斎（昼食）
　　午後一時　法要・法話
　　浄泉寺（岡崎市）
　　戸田恵信　師

○ 草取り・餅つき会

恒例となりました、草取りと餅つき会をします。
真面目に草取るもよし、
賑やかしに応援するもよし。
寺友の輪を広げましょう。

「行者のはからいにあらず」

「わしゃ死ぬのは怖くない」の意味を時々考えます。
先代住職の癌が再発し、医者が匙を投げ、民間療法を頼って安城の医院を訪ねた時、発せられました。思い詰めた感じが院内に響き、沢山の患者さんが先代を振り返りました。私は驚いて嗜めましたが、その後ずっと、その言葉の真意を探っています。
「やはり怖いのだ」怖くて動揺して、時所を構わず発してしまったのだろうと、当初は思っていました。
「抗議だったのかも知れない」こんな遠い所まで来て、高価な薬を処方されるのは不本意である。亡くなった後に考え始めました。
「寺に迷惑を掛けてまで長生きしたくない」そんな風に考える父でした。
「お前も動揺していいぞ、動揺して恥ずかしいと思ったら私を思い出せ」優しさから出た言葉かも知れません。
いろいろ考えて、答えを出したり消したりしています。どんな答えでも、考えて搾りだした結果なら『私のはからい』を逃れることはありません。
『善悪を沙汰せず、如来のはからいに任せよ』と聖人は仰います。きっと、父の言葉が浮かび上がってくる場面が来るのでしょう。その場面では、考えたり解釈など出来ずに、ただ涙が溢れるばかりでしょう。
そしてお念仏をやっと称えるだろうと思います。
私達は、そんな種を交換し合いながら暮らしています。

自利利他円満シテ　帰命方便巧荘厳
ココロモコトバモタエタレバ　不可思議尊ニ帰命セヨ
《讃阿弥陀仏偈和讃・親鸞聖人》

●正信偈ノート⑧・釋迦章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃
凡聖逆謗斉回入　如衆水入海一味

黄色の勤行本の二十ページから

よく一念喜愛の心を発すれば、煩悩を断ぜずして涅槃を得る。凡聖と逆謗斉しく回入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し。

・一念喜愛の心　如来の救済を喜び愛でる心（＝信心）
・凡聖逆謗　凡夫・聖者・悪人・法謗の人など
・回入　自力を翻して本願に帰入すること

〈浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〉

・現生十種の益

信心（＝すでに如来のお慈悲の中との確信）を賜ると、生活が様々な利益に彩られ輝き始めます。教行証文類では、これを十種に分類しています。

① 冥衆護持の益　怨霊・悪鬼など暗闇を恐れることがなくなる
② 至徳具足の益　自他・生死を超えた無量寿への感性が具わる
③ 転悪成善の益　判断基準が私→無量寿と移動し 悪が転ずる
④ 諸仏護念の益　私の信心が護られ 生活への不安がなくなる
⑤ 諸仏称讃の益　私の存在を讃えられ 生活への自信が漲る
⑥ 心光常護の益　私の居場所(大悲の中)への感性が鍛えられる
⑦ 心多歓喜の益　どんな居場所でも 頷き・喜べるようになる
⑧ 知恩報徳の益　生きる意味・目標が明確になる
⑨ 常行大悲の益　全ての行いや結果が大悲を証するものとなる
⑩ 入正定聚の益　往生成仏を約束された者となる

正信偈には、この中から五種を挙げています。今回は『転悪成善の益』の部分です。

・煩悩即菩提

お釈迦様は、覚りを得るための最後の禅定で「心身を煩わすものの正体」について問い、自らが作り出した煩悩と断じ、一つ一つ滅して行かれました。そして涅槃を得、ブッタ（＝覚者、如来）となりました〈釈尊の降魔〉。

煩悩の炎を全て吹き消した状態が涅槃なのだから、煩悩を持ったまま涅槃を得るということは、通常はあり得ません。しかし、大悲を鏡として、それが煩悩だと知らされてみれば、煩悩は小さな私が作り出した小さな煩いと確認でき、必要以上に煩うことがなくなります。自分の大きな影に怯えていた幼子が、それを影だと知った後、影はそのまま変わらないのに、もう怯えることがないのと同じです。

逆に影を見て光の方向を知ることができます。煩悩があるからこそ、大悲を鏡とする必要が生じる。鏡の前で、菩提心（＝覚りを求める心）も起こります。大悲の中では、忌むべき煩悩が菩提心へと転化されてしまうのです。

・無条件の済い

もともと不完全な私達は、真面目な人から悪人になってしまいます。失敗ばかりして迷惑を掛け、責任を取りきれていない現実。長生きする程、罪を重ねてしまいます。地獄行きの切符を手にして、為す術のない私達です。

大悲は、そんな私達を特に憐れんで、だからこそとお目当てにして、慈悲の光で照らします。

「衆生のあり方は問わない、我にまかせよ」が大悲の心ですが、私達の側からすると、為す術がないと極まった者から、済いを求める心が起こります。

済いの面でも転悪成善が完成しています。

「イジメ撲滅キャンペーンの罪」

古く小さな山寺で師匠・兄弟子・小僧さんが座禅をしています。
ローソクの火が燃え尽きるまでしゃべらない約束です。
そんな中、何度もすきま風が吹いて、火が大きく揺れました。
「ローソクの火が消えそうです」小僧さんが小声で言います。
「しゃべってはダメじゃないか」兄弟子が嗜めます。
「やれやれ、二人ともまだまだじゃな」と師匠。
三人ともしゃべってしまい、座禅はやり直しとなりました。
人は正しいと思うと、他人に訴えたくなります。
正義だからと吟味せずに、凶暴に振りかざしたりします。
正義の叫びで、小さな声をかき消してはいないでしょうか。

『迦陵頻伽』法話より

「私の教室にイジメはありません」と言う先生は、教室を見ていない先生です。イジメのない教室は無いと思います。教室ばかりではなく、職場でも地域でも家庭でもイジメはあるでしょう。坊さんの世界でもイジメはあるのです。
人が集まればイジメが起きる。それを無いと誤魔化すので、イジメられている子が孤立して、状況が深刻になってしまいます。無理に無いと言わしめる正義のキャンペーンの罪を思います。
「イジメがあっても活き活きと生きる」が大事です。学校の先生にはそんな指導を求めます。
イジメと活き活きは両立するのか？
自分を解かってくれる人が三人いれば、活き活きできると聞きました。その三人の一人になるのには「聞くこと」が大切です。
「我も共にあるぞ」阿弥陀様も呼んで下さっています。
「南無阿弥陀仏」と自分の正義を抑えつつ、問題を聞き抜くことで、解決の扉は自然に開かれるのだと思います。

お墓【私見？】

・ある想い出

ある斎場で赤ちゃんの火葬を待っていました。
お母さんの悲しみは深く、かける言葉が見つかりません。
見ると、小さな古い墓地が山肌に隣接していて、
手持無沙汰で散歩しました。
「それぞれの人生を一所懸命に生きた沢山の方々があります」
「そうですね」
ぽつりと、そんな会話をしたのを覚えています。
お墓は、押しつけがましく何かを語る訳ではありません。
けれど尋ねれば答えてくれる、
諸仏に出会える大切な場所だと思います。

・お墓参り

お墓参りでは、お掃除しながら愚痴を言いましょう。
きっと「私にもあったよ、大変だね」と答えてくれます。
懐かしさの中に抱かれ、癒される感じがします。
現実に頷き、立ち向かう勇気を持てるでしょう。

・お墓のあり方

お墓のあり方を問い直す風潮が盛んになってきました。
一族のお墓を保ち難くなった現代では当然だと思います。
火葬の場合、必要ないという意見にも一理あります。
歴史に学び、宗教に問うことも大切でしょう。
けれど、自らに問い直すことがもっと重要です。
お墓参りで何を受け取っているのか
次の世代にどう残したいのか
私も問い直してみたいと思います。

行事予定　～平成二十五年～

九月　二十三日（月・祝）　**秋季彼岸・永代経法会**
恒例の彼岸の法会です

十月　一日（火）　月例法話会・茶話会

十一月　一日（金）　月例法話会・茶話会

三日（日・祝）　**高田本山団体参拝**
本山の納骨堂法会に参拝します
市内・近郊の高田派寺院と共に
バスを借りての日帰り旅行です

十二月　一日（日）　月例法話会・茶話会

七日（土）　**報恩講**
八日（日）　真宗寺院で一番大切な法会です

一月　一日（水）　月例法話会・茶話会（修正会）

○　月例法話会では、『歎異抄』を題材に勉強しています
どなたでもご参加できます　ご参加お待ちしております

本山納骨堂法会・団体参拝のご案内

市内・近郊のご寺院様と貸切バスにて日帰り参拝します

■期日　平成二十五年十一月三日（日・文化の日）

■日程　六時三〇分　寺・豊橋駅集合
十時〇〇分　本山着
十四時〇〇分　おちょぼ稲荷
十八時三〇分　豊橋着（予定）

【参拝・昼食】
【観光・買物】

■会費　八、五〇〇円

■納骨　納骨の方は一霊につき二万円必要（納骨冥加金）

■申込　願成寺までご連絡下さい（十月十五日ごろまで）

‡ 後記 ‡

○　情報化社会は、情を伝えるのが難しい社会だと感じています。例えば携帯電話があることにより、待ちぼうけをすることがなくなりました。「こんなに長い時間あなたを待っていました」という姿になることが出来ません。待たれて驚いた表情にも出会えません。
そこに交わされる人情の機微を失ったのだと云えます。

○　メールのやり取りは息遣いを伝えません。急いで書いた文章は誤解を生みます。丁寧に書かれていても裏を読んだりして疑心暗鬼になります。

○　表情や体温や汗や涙、苦難を排して行う行為にそれぞれの想いの深さが表現されます。便利な世の中はそれを浅くしてしまいます。表現だけでなく、想いそのものが浅くなってしまった気がします。
結果として、存在が軽くなっていく…

○　私達は便利な世の中で、少し困っているのかも知れません。便利さが全てを均質化し「当たり前」にしてしまっています。当たり前に囲まれて情を動かすことがなく、刺激や癒しを求めて彷徨っています。

○　便利だからこそ情を動かす感性を磨かなければなりません。当たり前でも代わる者のない、たった一つの私の人生。それを愛おしむ感性を育てなければならないと思います。

○　私の思いに先立てて、私を囲み・育む働きを仏と呼びます。今日一日、何にどう育てられたかを問い直してみましょう。衰えや失敗・嫌なことをも含めて「仏のはからい」として手を合わせます。
すると、亡き人の声など、情を動かすものに触れる筈です。その感動こそ、私に自他・生死を超えさせる済いだと思います。